

レヴィナス思想における主体の生成と展開

—「横たわること」から「住まうこと」へ—

押 見 ま り

押見 まり

要旨

20世紀の哲学者レヴィナスは、その主著『全体性と無限』において、「主体性の擁護」を目標に掲げている。だが、ここで言われている「主体性」とはどのようなもので、「擁護」とは主体性をどのように捉えることなのだろうか。この問いに答えるためには、レヴィナスが主体概念をどのように捉えたのかが明らかにされねばならないだろう。

そこで本研究では、『実存から実存者へ』(*De l'existence à l'existant*, 1947)と『全体性と無限』(*Totalité et infini*, 1961)の二つの著作を取りあげ、そのなかでレヴィナスが主体概念をどのようなものとして捉えたかを明らかにすることを試みる。

『実存から実存者へ』において、レヴィナスは実存者たる自我と、その存在とを区別する。そのようにして導出された存在は、非人称の〈ある〉と呼ばれ、永遠的・普遍的に充溢するものである。〈ある〉は、存在者である諸物が覆い隠される「不眠」状態において自我の意識の前に現れるが、そのような状態において意識は〈ある〉に融即し、〈ある〉の対象へと減退して能動性を失ってしまう。それゆえ、〈ある〉の前では自我の意識は消滅するとされる。

しかし、自我の意識は「眠り」の可能性によって〈ある〉から逃れることができる。「眠る」とは、己の存在を場所に預けて横たわることであり、これによって普遍的な〈ある〉が特定の場所に凝集し存在者となる。つまり、自我の意識は眠ることで、人称的で場所性を持つ主体として生成するのである。レヴィナスはこのような主体生成の出来事を、「横たわること」と「品詞転換」を掛けた「イボスターズ実詞化」と名付けている。したがって、レヴィナスによると、主体は「横たわること」によって、人称的で場所性を持つ「実詞的」なものとして生成するのである。

「眠り」によって生成した主体は、世界のうちで諸物とかかわりあう。そのときの主体は、諸物それ自体を目的として一途に欲望している。このようなあり方は「享受すること」と呼ばれ、二つの著作で共通して扱われる主題である。そのようなあり方において、諸物およびそれらを享受した際の糧との関係はそれ自体「糧」として現れ、主体に同化して主体を養う。それゆえ「享受」は、諸物を同化する自我の肥大であると同時に、糧との関係としての情動を有する個としての「起き上がり」とされる。また、主体は享受によって養われるにもかかわらず、主体はそのとき自らの存在を目的とはしない。したがって、「享受」のあり方は「存在を越えて」と表され、後年主体のうちでもっとも重要な契機のひとつとして扱われることになる。

しかし主体を養う「糧」は、本源的には「元素」と呼ばれる不確かなものであり、

それはつねに主体に対する脅威に反転しうる。この不確かな「元素」に翻弄される弱さを主体は有しているが、その弱さは「住まうこと」によって克服されると『全体性と無限』で語られている。

レヴィナスによれば、主体は「家」に住まうことで、元素を遮断する。このことによって、主体は注意を自らに「集中」させ、反省的自己を獲得する。また、「家」は元素を遮断しつつも「窓」を持つことによって、主体が元素に脅かされることなく元素に働きかけることを可能にする。これにより、諸物を手で捕捉し我が物とする「労働」と「所有」の次元が拓かれる。そして、元素の影響が遮断されることで、主体の身体は主体の意のままに動かせるようになり、主体は自己身体を所有することができる。このことは、隷属の極点たる「死」の延期であり、この「死」の延期によって時間性が生じる。かくて主体は、時間性と能動性を具えた「エコノミックな主体」として成立するのである。

以上から、レヴィナスの主体論においては、主体は「横たわること」で〈ある〉から区別された実存者として生成し、「享受すること」で内観を有する個として「起き上がり」、「住まうこと」で統一的で能動的な「エコノミックな主体」として展開する、という諸相を看取することができる。これらの議論に見られる「主体における場所性の本源性」や「存在からの主体の分離」といった点は、レヴィナスの主体論の独自性を示す特徴と言えるだろう。

押見 まり

はじめに

レヴィナスは、その主著『全体性と無限』（1961）の序文で、「主体性の擁護」を目標として掲げている。だが、ここでの「主体性」が何を指し、「擁護」がそれに対してどのような立場をとることなのかを知るためには、レヴィナスが主体をどのようなものとして捉えていたのかを考えなければならない。そこで本稿では、主体がどのように生成し、どのようなあり方をしているとレヴィナスが考えたのか、また彼の主体論における固有な点はどのようなものか、『全体性と無限』および『実存から実存者へ』（1947）の二つの著作を参照しつつ検討する。

1. 『実存から実存者へ』¹におけるレヴィナスの主体概念

レヴィナスはどのような主体概念を築いたのだろうか。この章では1947年の著作『実存から実存者へ』を参照し、レヴィナスの主体概念の原型を検討する。

1.1. 存在者の非主体性——〈ある〉の目醒め

『実存から実存者へ』において、レヴィナスは実存と実存者を分離することを試みている。この「存在論的分離」²によって提出されたのが、「ある [il y a]」という非人称の存在概念である。この概念はいわば、レヴィナスによって「現象学的還元」され、「[存在者なき存在]にまで先鋭化」³された存在概念である。レヴィナスは次のように述べる。

あらゆる諸存在、それがものであれ人であれ、それらの無への回帰を想像しよう。この無への回帰をあらゆる出来事の外に位置づける

〔placer〕ことはできない。しかしこの無そのものは〔どうか〕。何かが起こっている、それが無の夜と沈黙であるとしても。この「何かが起こっている」の不確かさ〔indétermination〕は主語〔sujet〕の不確かさではなく、実詞〔un substantif〕にかかわることはない。この不確かさが指し示すのは、〔…〕どのような仕方であれ作用の主を持たない、匿名的なこの作用そのものの性質である。非人称的かつ匿名的でありながら遮ることができない存在のこの「焼尽」、無の底でささやく〔murmure〕もの、これを我々はある〔il y a〕という語によって書きとめる。あるは、人称の形をとることの拒否において、「存在一般」である。（EE 81）

無は存在の欠如として規定される。しかし、すべての存在者が無に帰したとしても、そこにはなお無が「存在する」。レヴィナスはここで、無を存在による「焼尽」、つまり存在の充溢として転倒させ、存在の「実存者なき実存」（ibid.）をあぶりだす。そしてこの存在概念を、フランス語で「～がある」という意味の非人称構文「il y a〔それがそこで持つ〕」と結びつける。かくて、存在一般の概念は非人称のものとして規定される。

無のうちで現れ無を焼尽する〈ある〉は、中断されることがない。レヴィナスは、この中断不可能性を「存在そのものの不眠」と言い表し、意識の不眠のなかで〈ある〉が現れてくると語る。

広がって避けられない匿名の実存のざわめきを引き裂くことの不可能性は、特に我々が眠ろうとしても眠れない瞬間を通して露わになる。〔…〕注意は、それを差し向ける自我の自由を前提とする。〔しかし〕我々の目を開いたままにする不眠の警戒〔vigilance 覚醒〕は主語がない。それは、不在に取り残された空虚のうちへの現前の——何かの回帰ではなく、現前の——回帰そのものなのだ。これは否定のただなかでのあるの覚醒であり、——存在するという営為が

押見 まり

けっして解き放たれない存在の確実性 [infaillibilité] であり——その [存在の] 不眠そのものなのだ。(EE 95-96)

夜の闇のなかでは諸事物の存在は覆い隠され、不眠の思考はその対象を失って、空虚へさまよい出てしまう。そうした空虚において、「実存者なき実存」としての〈ある〉が目醒め、現前するとレヴィナスは語る。〈ある〉の目醒めとは、あらゆる存在者が覆い隠されたなかでなお充満する〈ある〉が露わになることである。レヴィナスはこの「目醒め」について、「意識がそれに融即する [participer⁴]」(EE 96) ものと述べる。それは、自我の意識もまた一つの存在者、すなわち〈ある〉に送り出されるものであり、〈ある〉の一部だからだ。レヴィナスは、〈ある〉のただなかにおける自我は存在する主体ではなく、むしろ〈ある〉の対象だと語る (EE 97)。つまり「目醒め」においては、まさに「il y a」という構文の目的語、〈ある〉に持たれるものという位置に意識が追いやられてしまうのだ。レヴィナスはこの状態を「主体の消滅でもあるような状況」(EE 98) と呼ぶ。〈ある〉の前では、自我の意識はその主体性を喪失するのである。このような、実存者である自我とその存在との区別は、レヴィナスの存在論の根底にある大きな特徴だと言えよう。

しかしレヴィナスは、「意識はすでに目醒めを引き裂いている」(EE 96) とも述べる。それは、意識が無意識や眠ることといった消失の可能性、つまり〈ある〉から目を背ける可能性を持つからだ。〈ある〉の中断可能性としての「眠ること」は、同時に「主体の消滅」の中断可能性でもあり、主体の到来に大きくかわる契機とも言える。かくて、充満する〈ある〉の中断可能性として「眠ること」が提示される。

1.2. 充溢のうちの主体生成——定位

レヴィナスは、非人称の〈ある〉に対して、意識を人称的なものとして対置する。その際に参照されるのは、自我の意識を「思考するもの [res

cogitans]」、すなわち実体 [substantia] として規定したデカルトの思想である。

観念論によって我々は、思考を空間の外に位置づけることを習慣としたのだが、その思考は […] ここにある。デカルト的懐疑に除外された身体は、対象としての身体である。コギトは非人称的な位置、すなわち「思考がある」に至るのではない。そうではなく、現在の一人称すなわち「私は考えるものである」に [至るの] である。もゝという語は、ここでは素晴らしく厳密である。デカルト的コギトの最も深い教えは、まさに、思考を実体 [substance] として、つまり定位された [se poser] 何かとして発見したことに存する。思考は出発点を持つのだ。(EE 100-101)

レヴィナスはこの箇所で、デカルトの言うコギトが現在の一人称「私は考える」であり、さらにデカルトが人称的なコギトを「substantia」として規定したことに注目する。この「substantia (substance)」という語を、デカルトは実体すなわち「それが存在するのに何ら他の事物を要さないような仕方 で存在する事物」⁵ という意味で用いているが、レヴィナスは「実詞、名詞」の意味に読み替えることで、思考を人称的なものとして捉えなおす。人称的なものとしての思考は、非人称で全体的な〈ある〉とは異なり、特殊性を有している。つまり、非人称的ゆえに永遠的・普遍的に充溢する〈ある〉に対して、人称的な思考は時間性や場所性を伴って実存している。このことをレヴィナスは、思考とは「ここ [ici]」、〈ある〉の「局所化 [localisation]」であると語る。〈ある〉の局所化とは、〈ある〉が凝集することであり、この凝集によって存在者が成立する。それゆえ、人称的なものである思考は局所化したものなのだ。

思考である限りで、思考はここにあり、すでに永遠性と普遍性から

押見 まり

の避難所にある〔永遠性と普遍性を免れている〕のだ。空間を前提としない局所化。それは客観性の全くの対照物である。〔…〕意識の局所化は主観的なのではなく、主体の主体化〔subjectivation du sujet〕なのだ。意識の煌めき、充溢のうちのひだ、これは、客観的な空間へのいかなるかかわりもない、局所化と眠り〔sommeil〕の現象そのものであって、それはまさに、出来事を欠いた出来事、内的な出来事である。（EE 101-102）

ここでは、局所化が空間を前提としないことが示されている。というのも、局所化が意識の成立である以上、座標や幾何学で示せるような、認識されるものとしての客観的空間はまだ現れていないからだ。したがって、局所化は客観性に対するものとされ、おなじく意識の存在を前提とする主観的なものとしての見方も退けられる。この意識の成立としての局所化を、レヴィナスは「主体の主体化」という言葉で表している。

一方、「substantia」という語は「sub-stantia 横一たわるもの〔下に一立つもの〕」と読むこともできる。レヴィナスはそれゆえ、思考を「横たわるもの」としても捉えようとする。レヴィナスは、横たわることを「礎へ身を委ねること」、つまり自分が内に抱える自らの存在を場所に置く〔poser〕ことと捉える。この「自らの存在を置くこと」によって眠りが訪れ、ひとは〈ある〉の充溢から目を背けることができる。かくて、眠ることは「自らの存在を置くこと」、すなわち「定位〔position〕」として考えられる。したがって、局所化とは定位という、意識がそこから到来する主体生成の出来事なのである（EE 102-103）。

さらにレヴィナスは、身体を自分の存在の礎として捉え、そこから「定位、すなわち主体生成という出来事としての身体」という独自の身体観を導出する。

我々は自分の存在を抱えながら個々の自我として実存しているが、しかしその仕方は抽象的なものではなく、身体を伴った具体的なあり方で

ある。我々は意識のみで存在することはできず、身体がなければすぐさま〈ある〉に融即して個別性を失ってしまう。したがって、身体とは我々の個的な存在を支える土台、礎として捉えることができる。それゆえレヴィナスは身体を、存在の局所化という出来事として考える (EE 105)。レヴィナスによれば身体とは、匿名的な存在が場所を持ち、凝集して「実体的なもの」としての意識が到来することだ。このことは、不定形で匿名的な〈ある〉のうちで起こるが、しかし〈ある〉とは異質な出来事であるために「闖入 [irruption]」(ibid.) と言い表される。

ここまでで述べてきたように、レヴィナスの存在論においては匿名的な〈ある〉の定位により、闖入という形で主体が到来する。したがって、実存者としての主体に〈ある〉が先行するとされる。

意識、定位、現在、「私」は最初から——最後にはそうであるにもかかわらず——実存者なのではない。それらは、存在する^{イポスターズ}という名前の付けられない動詞が実詞^{イポスターズ}に変わる出来事である。それらは実詞化 [hypostase] なのだ。(EE 120)

匿名の存在から実詞としての存在者が誕生することを、レヴィナスは「実詞化 [hypostase]」^{イポスターズ}と呼ぶ。この語は、例えば動詞 *exister* [実存する] が名詞 *existence* [実存] になるといった、品詞の転化や転用された品詞を指す文法用語であるが、ラテン語の *substantia* に対応するギリシア語 *hypostasis* に由来する語でもある⁶。この語も *substantia* と同様、「hypo [下に] -stasis [立つこと]」つまり「横たわること」と読むことができる。この二つの意味から、レヴィナスの語る主体生成とは「〈ある〉という動詞の実詞への変容」と「横たわること」が重なる出来事と読むことができる。そしてレヴィナスの語る主体とは、「横たわるもの」なのだ。こうした意味で、レヴィナスの主体概念においてはその場所性が強調されていると言えよう。

押見 まり

さらに、この「横たわるもの」としての主体概念はその場所性とは別に、それまでの思想の主体概念と一線を画す特徴を有する。その特徴とは、この概念が、その非能動性により重心を置いて語られることである。レヴィナス以前の、世界を構成する主体の能動性を強調する思想とは異なり、『実存から実存者へ』における主体は〈ある〉の目醒めのうちで融即し、〈ある〉の対象にまで減退する。そして主体生成の出来事そのものも、意識の消失である眠りの可能性、すなわち〈ある〉からの逃走可能性に支えられている。これらのことから読み取れるのは、「横たわるもの」としての主体は、存在に参与するものではなく、むしろ〈ある〉の前では消滅し、〈ある〉に参与しないという逆説的な参与によって成立する、ということである。こうした特徴は、それまでの能動的で権能を持つ主体概念に対して、「後ろ向き」で「弱い」主体概念を示すとも言えよう。

しかし現実の生活では、我々はやはり主体としての権能を有するよう
に思われる。日常会話においては、「主体性」「主体的」という語が「能
動性」「能動的」と同義的に使われることもしばしばだ。こうした主体概
念に対して、レヴィナスの提示した「弱い」主体概念はどのように関係
するのだろうか。

2. 世界内の主体——享受と糧

前章では、『実存から実存者へ』において主体が非能動的な「横たわる
もの」として提示されたことを見た。そうした主体は、どのように世界
とかかわるのだろうか。この問いを考えるために、この章では『実存から
実存者へ』と『全体性と無限』で共通して論じられる「糧」と「享受」
の主題を取りあげる。

2.1. 世界への一途なかかわり——『実存から実存者へ』における志向と糧

本節では、『実存から実存者へ』における、世界に対する自我のかかわり方と自我に対する世界の現れ方についての記述を参照し、そのなかで主体がどのようなあり方をしているか検討する。

『実存から実存者へ』では、世界に対する自我の関係が「志向〔intention 意図〕」と呼ばれ、志向とは欲望〔désir〕であると語られる。

世界のうちでは、存在するという作用、動詞〔として〕の存在という突発事〔péripéties〕に、形容詞の担い手となる実体的なものが、諸存在がとって代わる。〔この諸存在は、〕諸価値を与えられ、我々の志向に供されている。世界のうちに在ることは、諸事物に結びつけられることである。〔…〕志向の概念はこの関係を最も正確な仕方
で表している。しかしこの概念は、欲望を刺激して志向を活性化させる普通の意味〔sens〕において捉えねばならない。〔…〕〔志向の概念は〕欲望であって気遣いではまったくなく、それが即座の気遣いでない限りは。(EE 49)

世界のうちでは、非人称で匿名的な〈ある〉を存在者である諸事物が覆い隠している。自我は世界内に在ることで、こうした諸事物に結ばれているとレヴィナスは言う。レヴィナスはこの関係に「志向」という語を当てているが、その意味はそれまでの思想でこの語が指してきた意味とは異なると述べる。西谷修も指摘するように⁷、「意図」や「意向」に対応するこの語の日常的な意味は目的や欲望の対象を暗示する。それゆえレヴィナスは、志向の概念を気遣いではなく諸事物へ向かう欲望として規定する。

だが、諸事物へ向かう欲望の背後には、やはり存在への欲望、「実存への気遣い」があるのではないか。このような問いに対してレヴィナスは、

押見 まり

背後にある「気遣い」はあくまで暗黙的で無意識的、つまり意識に現れないものだとし、それゆえに欲望されるものと実存の関係を説明する根拠は事後的なものだと捉える。したがって欲望としての志向は、その対象そのものを目的とし、ほかに目的を持たない、つまり裏のない一途な〔sincère 廉直な〕ものである（EE 49-50）。

一方、この一途な志向に対して、世界は欲望される「糧〔nourriture〕」として現れる。「糧」とは、何らかの目的のために供される「用具」とは異なる概念である。

世界のうちに与えられているものすべてが、用具ではない。「nourriture〔養うもの〕」とは、兵站部にとって、「兵営」の宿舎や退避壕である。〔しかし〕兵士にとっては、パン、衣服、寝床は資材ではない。それらは「～を目指す手段〔en vue de〕」ではなく、目的である。（EE 57）

ここで挙げられている「用具」との差異は、「糧」の目的性である。「用具」は外部にある何らかの目的を「目指す」中間項的なものであるのに対して、「糧」はそれ自体が目的とされる。目的である糧が消尽されることによって、欲望は充足され、現実成就する。この関係をレヴィナスは「欲望とその充足との完璧な対応」（ibid.）と述べ、世界の側においても志向の一途さが見て取れることを示す。かくて、志向に対して「世界は、与えられたもの」（EE 63）として現れる。

そして、この「与えられたもの」としての世界を目的とする一途な志向というかわりこそが生きることだとレヴィナスは語る。

そこで対象が欲望とちょうど一致する、この構造が我々の世界内存在の総体の特徴づける。いたるところで、行為の対象が、少なくとも現象のうちでは、実存することの気遣いに送り返されることはな

い。我々の実存を作るのは対象それ自身である。我々は呼吸するために呼吸し、飲み食いするために飲み食いし、身を守るために身を守り、好奇心を充たすために学び、散歩するために散歩するのだ。これらすべては生きるためではない。これらすべてが生きることなのだ。生きることは一途さである。(EE 58-59)

引用によると、意識に現れる限りにおいて、欲望はその対象と一致し、その対象が実存を構成する。このように、目的と行為が一致する一途な志向という仕方で、我々は世界内に存在し、世界にかかわっている。そうした、世界そのものを目的として一途に志向するあり方がのちに『全体性と無限』において「享受 [jouissance]」として語り直される。

2.2. 自己の内の主体——『全体性と無限』における享受

『全体性と無限』では、「～によって生きること [vivre de...]」(TI 112) という人間の本源的なあり方が示される。人間は、「～」に該当する「それによって生きるもの」を享受する [jouir 楽しむ] ことで養われる。しかしここでも、「それによって生きるもの」は生の手段や道具、目的ではなく、人間はそれらに依存しているのではないとレヴィナスは言う。

彼によれば、「それによって生きるもの」はつねに、享受すなわち「楽しみ」の対象という側面を持つとされる。楽しみの対象であるとは、その使用目的に関係なく「趣味」に応えることであり、それゆえ享受の対象は有用性や目的連関によっては汲みつくされない。そのうえ、「～によって生きること」は道具の目的連関とは異なり、依存ではなくむしろ自存性を示すとされる (TI 113)。道具の目的連関は、目的というそれ自体とは他なるものによって意味づけられるという意味で依存であるのに対し、享受はその対象それ自体を目的とし、それ自体に意味づけられる点で自存している。ゆえにレヴィナスは享受という自存したあり方があらゆる自存性の基礎にあると主張する。

押見 まり

だが、その自存性は享受の対象に養われているという点で、やはり依存ではないだろうか。レヴィナスはそのような問いに対して否と答える。というのは、享受の対象は生にとって必ずしも不可欠ではなく、酒や煙草、麻薬などのように場合によっては生を害するものでもありうるからだ。そのうえ、人は必需品でないものを欠くことよりもしばしば死の方を選ぶうるとレヴィナスは語る (ibid.)。それゆえ享受は「存在を越えて [au-dessus de l'être]」であり、他の存在者とは異なる唯一的な「この私」を確立させるとされる (TI 124)。そして、享受の本質をなしているのは、実際には生を害しうるものであったとしても、そのものを享受することで活動が養われることであるとレヴィナスは述べる。

気力を得ることの手段としての糧は、〈同〉への他なるものの変換であって、そのことは享受の本質のうちにある。他なるものとして認識された他なるもののエネルギーが […] 享受のうちで、私のエネルギー、私の力、私になるのだ。あらゆる享受はこの意味で栄養補給である。(TI 113)

糧がどのようなものであるにせよ享受によって活動が養われるのは、享受の本質が同化の運動だからである。享受の対象は享受によって同化され、消尽される。それゆえ、活動が養われているといっても、依存対象としての養うものはすでに同化され、〈私〉は〈私〉自身に依存していることになる。かくて、享受することは依存ではなく「依存のうちの支配」(TI 118)としての自存を描くのである。

だがレヴィナスは、人は糧だけを享受するのではないと言う。享受の運動は糧のみならず、糧との関係そのものにも向かい、そこにまた関係が生まれる形で循環してゆく。なにかを享受することで悲しみや喜びといった糧との関係が生ずるが、その悲しみや喜びそのものがまた糧となって次の活動を動かす力となる (TI 114)。このように、循環しながら自己

の内へと向かう性質を有することから、享受は〈私〉を極とする「巻きつきと内転を描く螺旋」(TI 123)として描かれる。

享受することの自足は、〈エゴ〉と〈同〉のエゴイズムと自己同一性〔ipséité〕を際立たせる。享受は自己への退却、内転なのだ。情動的な状態と呼ばれるものは、精彩を欠く単調な状態ではなく、そこで自己が起き上がるところの、振動する興奮なのである。(ibid.)

こうして享受の運動は、他なるものを内に取り込んで支配してゆく同化の運動であると同時に、自己の内に閉じこもり、自己として「起き上がる⁸⁾」運動としても規定される。換言すれば〈私〉が自閉しつつ肥大してゆく運動であり、そうした支配的な〈エゴ〉を持つあり方はまさしく「エゴイズム」である。したがって、享受における主体は自己の内に閉じこもりつつ起き上がるようなあり方をしていると言える。このようなあり方が主体に具わっていることは、後に展開されるレヴィナス独自の思想において重要な役割を担う契機となる。

しかし、享受する〈私〉の肥大の運動も全能ではなく、不安定さを有している。その不安定さは、ほかならぬ糧の裏面に由来するとレヴィナスは言う。次節では、〈私〉を養う糧の裏の顔である「元素」について見てゆこう。

2.3. 元素の不確かさ——『全体性と無限』における糧

〈私〉が享受によって他なるものを同化し、拡張してゆく一方で、享受される糧は『全体性と無限』においてどのように語られるのだろうか。素朴に考えるのならば、糧は空気や食べ物、飲み物などの生命維持に不可欠な「物」と言えよう。だがレヴィナスは、糧は本源的には物ではなく、諸物の背後に諸物が発する「淵源」があると語る (TI 137)。この「淵源」は「環境〔milieu〕」と言い換えられ⁹⁾、次のように続けられる。

押見 まり

諸物がそこから出発して私に到来するところの環境は、相続人不在、本質的に「だれにも」所有不可能な基底あるいは場のうちに横たわる。〔すなわち〕大地、海、光、街である。内包されたり包括されたりすることなく、包括し内包する所有不可能なものただなかに、すべての関係または所有は位置づけられる。我々はそれを、元素的なものと呼ぶ。(TI 138)

この箇所ではレヴィナスは、「背後の淵源」を「元素的なもの」と名付けている。これは後に「元素 [élément]」¹⁰ と言い換えられ、レヴィナスの世界観を表す概念として登場する。

元素は、「形なき内容」(ibid.)、「純粋な質」(TI 139) などと形容され、不確かで境界づけられていない匿名的なものとされる (TI 138-139)。実際、身の回りを見てみても、諸物の境界は非常に曖昧なものである。我々が枝や葉として認識するものは幹につながっており、どこから枝であるのか、葉であるのか判然としない。さらに、幹の内側には土から吸い上げられた水が通っているが、その水には土が溶け込み、地下水の流れを辿ればやがて海に行き着く。葉は、表面の組織で大気と溶け合いながら、光合成や呼吸をしている。こうした意味で、ものとはただ単一のものでなく、様々なものが溶け合う「元素」の一部である。そして人間もまた、この元素に「浸る [baigner]」という形で元素と溶け合っている (TI 138)。元素のなかに浸る身体は、元素に塞がれつつもそれらを享受し、「～によって生きること」を実現する (TI 177)。

しかし、元素のうちには不安をもたらす未来が潜み、それによって享受はつねに飢えと貧しさに反転しうるとレヴィナスは言う¹¹。

元素的なものは私に適合している——私はそれを享受する。元素的なものが応ずるところの欲求は、この適合ないしこの幸福の様式そのものである。未来の不確かさのみが、欲求における不安、貧しさ

をもたらす。[…] 糧は幸福な偶然のように到来する。糧は両義的であって、一方で供され満足させるが、しかし同時に遠ざかり、有限のうちの無限に、物の構造に消え失せる。(TI 150-151)

元素は糧となり人を養うが、その糧をいつも保証するわけではない。今は食べ物に恵まれ、充足していても、明日も同じように糧に恵まれるかわからない。この不確かさには、肥大する〈同〉の権能も及ばない。それゆえレヴィナスは、この不確かさを非人称的な神々の神性になぞらえる (TI 151)。しかも、この不確かさは元素に浸りこんでいる身体にも及ぶのだ。

生は身体であって、[その身体とは] 生の充足が際立つところの身体であるだけでなく、物理的諸力の十字路、結果としての身体 [corps-effet] なのだ。生は、その深い恐怖のうちで、主としての身体 [corps-maître] から隷属する身体 [corps-esclave] へ、健康から病へというつねに可能な逆転を目撃する。(TI 177)

元素に浸りこむ身体は、みずからを塞ぎ充たす元素を糧として同化する一方で、物理的諸力としての元素に虐げられる。たとえば水は身体の7割を構成すると言われ、生命維持に不可欠だが、川や海で人を溺れさせる危険なものでもある。そのとき身体は、元素を同化し従える「主」から、元素の力になすすべもない「隷属」へと逆転してしまう。しかもこの逆転は、元素の不確かさゆえに、つねに起こりうる。享受する主体は元素を糧として支配する反面、飢えと隷属の不安をもたらす元素の不確かさに怯えるものでもあるのだ。このように、不確かさに翻弄される主体のあり方は、「弱さ」と言ってもよいだろう。つまり、享受する主体は権能と弱さを持ち合わせているのである。

しかしレヴィナスは、享受は労働と所有によってこの弱さを克服しう

押見 まり

ると述べ（TI 151）、労働と所有の条件として「住まうこと」を提示するのだ。

3. 「わが家」の主体——「住まうこと」

前章において、享受する主体は権能と弱さを同時に持ち合わせていることが示された。しかし、レヴィナスは労働と所有によって享受する主体がその弱さを克服しようと述べ、その条件として「住まうこと」を提示する。そこでこの章では、「住まうこと」による、享受する主体のあり方の変化を検討する。

3.1. 自然との決別——元素と「家」

享受する主体の「弱さ」は、元素のうちに不確かな未来が潜んでいることに由来する。しかし日常生活では「未来」という語はむしろ、企図や予期、現在の延長といった意味において使われるように思われる。レヴィナスは、不確かな未来がこうした意味に変わる条件として「家」を提示する。

明日への気づかいのうちで、感受性〔にとって〕の、本質的に不確定な未来という本源的な現象が光る〔際立つ〕。この未来が延期と遅れという意味のうちで立ち現れるためには、分離された存在が集中し、表象を持ちえなければならない。〔労働が〕この意味を越えて未来の不確かさとその不安を統御し、所有を創設することで、エコノミックな自存性という諸相のもとの分離を素描する。集中〔recueillement〕と表象は、住みかに住むこと、あるいは「家〔maison〕」として具体的に生起する。（TI 160-161）

この箇所では、〈ある〉から分離されたものが集中と表象を持つことによって、不確かな未来が延期と遅れという意味で現れるとされ、集中と表象は「住みかに住むこと」として生起すると述べられる。つまり、分離された存在が住みかに住むことで集中と表象が獲得され、未来が延期と遅れとして現れることになる。延期としての未来については後述することにして、まずは集中について考えておこう。住むことで獲得される「集中〔recueillement〕」とはどのようなことを指しているのか。

レヴィナスは「集中」を、「語の普通の意味で、世界が要請する即時の反応の中断を示し、自己自身、その可能性、状況へのより大きな注意を目指す」(TI 164)と定義する。不確定な元素である外界はその変化によって、そこに内在する人間に即時の注意と変化への反応をつねに求めるが、それらの注意と反応を中断しうる状態が「集中」である。また「recueillement」という語は「内省、静修」と訳され、「自らを省みること」を意味する一方、「寄せ集めること」という意味も有する。つまり「集中」とは、外界への注意を中断し、注意を自分自身に寄せ集めて内省することである。

しかしなぜ家に住むことで集中と表象が獲得されるのか、事の次第ははまだ詳らかではない。レヴィナスはその答えを家の機能に帰している。

家は、地や大気、光〔、〕¹² 森、道、海、河の匿名性との関係において退いた位置〔retrait〕にある。家は「通りに面して」〔資産を持って〕いるが、秘密も持っている。分離された存在は〔自然的な実存においては〕その享受が守られずに萎縮し、気がかりに逆転するところの環境に浸かっているのだが、住まいによってはじめて、そうした自然的な実存と決別する。〔…〕家の本源的な機能は、存在を建物の建築によって方向づけること、場所を見つけることにあるのではなく——元素の充溢を断つこと、〈私〉がわが家に住まうことで自ら集中する非一場所〔utopie〕をそこで拓くことにある。(TI 167)

押見 まり

家は、主体を浸す元素の充溢を遮断し、主体を元素から保護する。主体は元素から護られることで、元素の不確かさを回避し、不確かさに隷属する自然的な実存と手を切る。レヴィナスは、家がそのようにして元素の場所ではない場所を拓くことが家の本源的な機能だと言い、そのような家のあり方を「脱一領域性〔extra-territorialité 治外法権〕」とも呼ぶ(TI 161)。そして、その「非一場所」において〈私〉は「わが家」に住まい、自ら集中する。つまり、元素から分離され保護されることによって、それまで外界に向けていなければならなかった注意のベクトルが反転し、自己のうちへと向かうことで表象の可能性が準備される。外界によって「気が散って」いたのが、文字通り自分に「集中」することで、「内部性〔intérieurité〕」としての反省的な「自己」が到来するのである。かくて、人間は家の「脱一領域性」によって元素の不確かさと決別し、集中と表象を獲得するのだ。

しかし、未来は未だ企図や予期、延長としての意味を持たず、また享受する主体を助ける労働と所有も未だ拓かれていない。次節では、これらの始まりがどのように語られるのか見てゆこう。

3.2. 「世界」と「時間」の拓け——労働と所有

家に住まうことで元素から保護された主体は、外界の元素とどのようにかかわるのだろうか。レヴィナスは、家は元素に対して完全に閉ざされているわけではないと語る。

住まいは、そのあり方において、それが分離しているところの元素に開かれたままでありつづける。隔たりは、それ自体両義的であって、〔つまり〕遠ざかることであると同時に近づくことであるのだが、窓は隔たりからこの両義性を取り除き、支配する視線、視線から逃れる視線、観想する視線を可能にする。諸元素は、自我の意のままとなる——手に取ること、あるいは残しておくことに。労働は、それ

以降、諸物を諸元素から剥ぎ取り、そして世界を発見することになる。
(TI 167-168)

ここでは、住まいが「窓」という開口部を持つことが注目されている。家に窓が穿たれていることによって、人は元素に隷属することなく元素にかかわることができるようになり、元素に対する優位性を獲得する。その結果、元素は自我に従属し、手に取ることによって元素から諸物が切り離されるようになる。レヴィナスは、この、手がつかむことでなされる元素の捕捉を労働と定義している¹³。そして、捕捉された元素は家の中で固定されて「死せる自然〔nature morte 静物〕」となり、「動産〔meuble〕」や「物」として現れる。所有とはこのように、元素の存在を遮ることであり、この中断によって所有は物を「把一握〔com-prendre〕」する (TI 169)。この切り離しに基づく諸物の把握によって、視線の水準での切り離し、すなわち枝や葉といった諸物の認識が可能になるのである。したがって、労働と所有、またそこから帰結する諸物の認識は「家」を前提とすることになる。こうして労働と所有によって諸物の認識が拓かれることが「世界の発見」であり、このことが「世界の潜在的な誕生は住みかから生ずる」(TI 168)と語られる所以である。

かくて労働と所有は、切り離された諸物を未来の享受のために保存することで、元素の不確かな未来を鎮める。労働は、元素を自在に扱うことで、その不確かな未来を中断し、制御するのである (TI 172)。

一方、元素を遮ることで意のままになるのは諸物だけではない。レヴィナスは、住まいによって身体が所有されると述べる。彼によれば、元素の影響を遮蔽する家の機能によって主体の隷属も中断され、そのことによって身体が主体の意のままになる。つまり主体は、身体を自らに従属させることで身体を所有するのである。したがって、家が元素の領域を脱していることで身体的所有が実現されることになる (TI 174)。こうして主体は元素への隷属の可能性を克服し、「働きかける」という能動性に

押見 まり

重点を置いて身体を動かすことが可能になる。

こうした身体を受動性の中断としての身体の所有は、死の延期としての時間性をもたらすとレヴィナスは語る。

生の無防備さを克服する住まいは、生が沈む危険にさらされる期日の継続的延期である。死についての意識とは、その日付について本質的に無知なままの、死の継続的延期についての意識である。労働する身体としての享受は、最初のこの延期のうちにとどまりつづける。この延期が時間の次元そのものを拓くものである。(TI 178)

住まいは元素を遮蔽することで、主体が身体を能動的に動かすことを可能にする。この身体を受動性の中断は、時に隷属の極点としての死がもたらされることの延期と同義である。「死」という絶対的な決定事項が継続的に後ろ倒しにされることで、「延期」や「遅れ」としての未来の観念、すなわち時間性が拓かれるとここでは述べられている。そしてレヴィナスは、この時間性の拓けによって、意識がもたらされると語る。

彼によれば、時間性は死の延期として拓かれる。死とは身体の物体化の極点であるがゆえに、時間性とは「身体の物体性の延期」である。この物体性からの隔たりが「脱肉化 [désincarnation]」であり、意識として生起する。それゆえレヴィナスは、住まうことから発する自由は住まう者に残された時間、すなわち弱さが克服されている時間によると語っている (TI 179)。

レヴィナスは、こうした主体のあり方を「エコノミックな実存 [existence économique]」(TI 164) と述べている。「エコノミー」とはギリシア語の「家 [oikos / oikia]」と「法 [nomos]」の合成語で、「家政、経済」を意味する一方、「組成、統合的組織 [œcuménisme]」にもかかわる語である¹⁴。このことから「エコノミックな実存」とは、家において労働と所有を展開すると同時に、集中によって自己に〈同〉としての統合性

を見出し、取りまとめるあり方と考えられる。

かくて主体は、住まうことによって身体を所有し、時間性と意識を獲得し、「エコノミックな主体」として成立することになる。この主体は、〈同〉として存立し、その同化の権能を外界へ向けてゆく。このことは、主体の受動性が中断されることによって、能動性が獲得されることに他ならない。したがって、主体は住まうことによって能動的な主体になると言えるだろう。

終わりに

ここまで、レヴィナスが語る「主体のあり方」を辿り、彼の主体論に固有な点を検討してきた。最後に、本稿における議論を総括しておこう。

レヴィナスは、『実存から実存者へ』において、実存者たる自我と、実存たる〈ある〉とを区別し、〈ある〉の前では自我は融即してしまうと語った。しかし、自我は眠ることで〈ある〉から逃走し、実存者として成立する。つまり主体は、横たわって自らの存在を場所に預けることで、何者かとして「実詞化」するのだ。以上から、『実存から実存者へ』においては、主体は場所性によって生成すると言える。

場所を持つことで生成した主体は、世界の中の諸物とかかわりを持つ。その際主体は、諸物それ自体を目的として欲望し、「糧」として「享受」する。こうしたかかわり方によって、主体は諸物を自らに同化し、個として起き上がる。この「享受」のあり方は、自らの存在を目的としないあり方であり、レヴィナス思想において重要な役割を果たす契機である。

だが、主体を養う「糧」は、本源的には主体が浸る「元素」であり、時に主体の脅威となる不確かさを有している。享受する主体は元素に脅かされる弱さを有しているが、「住まうこと」によってこの弱さを克服することになる。

押見 まり

住まうことで、主体は元素の影響から隔離され、それまで諸物に向けて散じていた注意が反転し、自らに「集中」する。このことによって、反省的な自己が主体に到来する。さらに、主体が住まう「家」は「窓」を持つことで、主体が元素に影響されずにかかわることを可能にし、この優位性によって、諸物を手で捕捉し持ち帰る「労働」と「所有」の次元が拓かれる。そして、元素が遮られることで、主体の身体は元素から守られ、主体の意のままになる。この身体の所有はすなわち、隷属の極点たる死の延期であり、このことが現在の延長としての未来の観念と時間性が拓く。かくて、主体は住まうことで主体としての統合性を獲得するのだ。

以上から、レヴィナスの主体論においては、主体は存在一般から区別され、それゆえ存在を目的とせずに諸物とかかわり、場所性によってその生成と展開がなされるようなものであることが読み取れる。こうした特徴を有する点で、レヴィナスの思想は、この世界に根付いて生きる人間の具体的なあり方をよく捉えていると言えるのではないだろうか。

注

¹ 以下、本稿で参照するレヴィナスの著作については略号と頁数で表記する。使用する略号は次の通りである。

TI: *Totalité et infini: Essai sur l'extériorité*, Le Livre de Poche, 2016 (Original edition: Martinus Nijhoff, 1971). (邦訳:『全体性と無限』熊野純彦訳、岩波文庫、2005年)

EE: *De l'existence à l'existant*, Librairie Philosophique J. VRIN, 2013 (Librairie Philosophique J. VRIN, 1990 pour l'édition de poche, 1947 pour la première édition). (邦訳:『実存から実存者へ』西谷修訳、ちくま学芸文庫、2005年)

² レヴィナス『実存から実存者へ』（ちくま学芸文庫、2005年）中の訳者西谷修による訳注（「実詞化」訳注（16）（212頁））。

³ 同上。

⁴ 「participation」「participer」は「分有（する）」「参与（する）」と訳される

ことが多いが、レヴィナスはこの語について、「レヴィ＝ブリュールがこの語に与えた意味で」(EE 85)と限定している。社会学者レヴィ＝ブリュールは『未開社会の思惟』のなかで「他により適当な語がないので」と留保しつつ「『未開』心性に固有の原理」を表すものとしてこの語を使用した(レヴィ＝ブリュール『未開社会の思惟』山田吉彦訳、岩波文庫、1953年、上巻94頁)。レヴィナス研究においては、この記述を踏まえ、レヴィ＝ブリュールの「participier」の訳語である「融即(する)」を引き継いで使用することが通例になっている。Cf. 藤岡俊博『レヴィナスと「場所」の倫理』、東京大学出版会、2014年、82-93頁。

- ⁵ ルネ・デカルト『哲学原理』山田弘明、吉田健太郎、久保田進一、岩佐宣明訳・注解、ちくま学芸文庫、2009年、207頁。
- ⁶ レヴィナス『実存から実存者へ』(ちくま学芸文庫、2005年)中の訳者西谷修による訳注(「実詞化」訳注(16)(204-213頁))。
- ⁷ レヴィナス『実存から実存者へ』(ちくま学芸文庫、2005年)中の訳者西谷修による訳注(「実詞化」訳注(2)(106頁))。西谷はこの注のなかで、「普通の意味」を選択することでレヴィナスは志向を生る直接性のなかでの働きとして語っていることを指摘している。
- ⁸ Cf. 藤岡俊博『レヴィナスと「場所」の倫理』、東京大学出版会、2014年、157頁。
- ⁹ この「背後の淵源」と「環境」の言い換えの理由として、レヴィナスが環境を「主体を養う条件」として見ていたことが挙げられる。藤岡俊博は「レヴィナスが問題とする環境は、『同』がそこで生きる環境世界のことを意味している」(『レヴィナスと「場所」の倫理』東京大学出版会、2014年、158頁)と述べ、さらにその環境世界について、「『同』の圏域として広がる環境世界であり、当初は他なるものだった世界が同化されることで『同』を養う条件と化したものである」(同書159頁)ゆえに海や地と並んで街が挙げられていると指摘している。このような、人間が自分自身の作ったものに養われるという相互的な循環関係については、アレントも指摘している。Cf. ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年、22,43頁。
- ¹⁰ ここで言われている「元素」とは古代ギリシアの自然哲学になぞらえた表現である。ソクラテスの登場以前の古代ギリシアでは、万物の根源(アルケー)についての探究がなされた。なかでもアナクシマンドロスによる「アペイロン(無限定的なもの)」としての万物の根源の規定は、ここでの「元素」についての記述に通じるものがある。実際、『全体性と無限』においても元素を「アペイロン」と表現している箇所がある(TI 150, 170, 175 etc.)。なお、現代フランス語における複数形の「les éléments」は雨風などの「自然の諸力」を

押見 まり

意味する。

- ¹¹ 人が溶け込む「元素」は、主体が融即する匿名の〈ある〉を思わせる。実際レヴィナスは、元素が不確かな未来という「夜の次元」へ至り、その「夜の次元」を〈ある〉として記したと述べている（TI 151）。しかし『実存から実存者へ』では、「元素」という語は芸術と感覚を論じる文脈でわずかに使われるのみである（EE 75,76）。
- ¹² 本稿が参照している *Livre de Poche* 版『全体性と無限』の該当箇所にはヴィルギュールがなく、「l'anonymat de la terre, de l'air de la lumière,」となっているが、前後の文脈からヴィルギュールがないのは不自然であり、誤植と考えられる。そのため、この箇所を引用するにあたって読点を補った。
- ¹³ こうした労働観はロックの思想を想起させる。だが、ロックは身体が主体に本源的に属する所有物であるために、その身体を用いた労働が他の諸物の所有を基礎づけるとするのに対して、レヴィナスは、身体は本源的には所有の外部にあるとの立場をとっている（TI 174）。Cf. ジョン・ロック『完訳統治二論』加藤節訳、岩波文庫、2010年、324-353頁。
- ¹⁴ Cf. レヴィナス『全体性と無限』（岩波文庫、2005年）の訳者熊野純彦による訳注（訳注（第一部A）（32）、上巻393-394頁）。

文献表

【レヴィナスの著作】

Lévinas, Emmanuel *De l'existence à l'existant*, Librairie Philosophique J. VRIN, 2013 (Librairie Philosophique J. VRIN, 1990 pour l'édition de poche, 1947 pour la première édition).

（邦訳：エマニュエル・レヴィナス『実存から実存者へ』西谷修訳、ちくま学芸文庫、2005年）

本文中で引用する際は、（EE ページ数）と表記。なお、引用した訳文はすべて引用者私訳。

Lévinas, Emmanuel *Totalité et infini: Essai sur l'extériorité*, Le Livre de Poche, 2016 (Original edition: Martinus Nijhoff, 1971).

（邦訳：レヴィナス『全体性と無限』熊野純彦訳、岩波文庫、2005年）

本文中で引用する際は、（TI ページ数）と表記。なお、引用した訳文はすべて引用者私訳。

エマニュエル・レヴィナス『レヴィナス著作集2 哲学コラージュ講演集』藤岡俊博、渡名喜庸哲、三浦直希訳、法政大学出版局、2016年。

【その他単行本】

アリストテレス『政治学』 第一巻 山本光雄訳、『アリストテレス全集』第15巻、岩波書店、1969年。

ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年。

ルネ・デカルト『哲学原理』山田弘明、吉田健太郎、久保田進一、岩佐宣明訳・注解、ちくま学芸文庫、2009年。

ハイデガー『存在と時間(一)』熊野純彦訳、岩波文庫、2013年。

ロジェ・ビュルグヒュラーヴ「貨幣と常に改善される正義」レヴィナス『貨幣の哲学』ビュルグヒュラーヴ編、合田正人、三浦直希訳、法政大学出版局、2003年。

レヴィ=ブリュル『未開社会の思惟』山田吉彦訳、岩波文庫、1953年。

ジョン・ロック『完訳統治二論』加藤節訳、岩波文庫、2010年。

小手川正二郎『甦るレヴィナス 『全体性と無限』読解』、水声社、2015年。

藤岡俊博『レヴィナスと「場所」の倫理』、東京大学出版会、2014年。

渡邊二郎「ハイデッガーの実存思想」『渡邊二郎著作集 第1巻 ハイデッガー I』(編集 高山守、千田義光、久保陽一、榊原哲也、森一郎)、筑摩書房、2010年。

【論文・発表等】

三浦直希「50年代のレヴィナスにおける「エコノミー」」『人文学報 第333号』東京都立大学人文学部、2002-2003年、57-74頁。

Dekkers, Wim “Dwelling, house and home: towards a home-led perspective on dementia care”, *Med Health Care and Philos* (2011) 14 :291-300.

井上瞳「生の内側に立つ——レヴィナス「分離」を手掛かりに」、日本現象学会2017年度第39回研究大会発表。